

近代中国における図書館人材養成機関の設立

—武昌文華図書館学専科学校を中心に—

生涯学習基盤経営コース 丁 健

The Establishment of the librarian Training Organization in Modern China :
Boone Library School

Jian DING

This paper attempts to clarify the development and characteristics of librarian training in modern China, by focusing on the Boone Library School which established by Miss Wood from America. For the establishment of Boone Library School by Miss Wood, a school library movement has been promoted from 1920s to 1930s, that was greatly influenced the modernization of library science in modern China.

目 次

1. はじめに
2. M.ウッドによる中国公共図書館建設運動
3. 図書館学専門人材の養成
 - A 武昌文華図書館学専科学校の設立
 1. 2年制図書館学専門教育
 - a. カリキュラムの編成
 - b. カリキュラムの特徴
 2. 図書館学教育の研究
 - a. 研究成果
 - b. 研究動向
 3. 短期図書館職員養成
 - B アメリカによる資金援助
4. おわりに

1. はじめに

本稿は、1920年にアメリカの強い影響を受けて中国で創設された最初の図書館人材養成機関に注目し考察することを目的とする。具体的には、1920年代にアメリカ人M.ウッド（Mary Elizabeth Wood, 中国名章棟華, 1862～1931）の精力的な推進により設立された中国最初の図書館人材養成機関「武昌文華図書館学専科学校」¹⁾（Boone Library School）に着目し、同校によるアメリカ図書館学の中国への導入、さらにその定着化を明らかにすることを通して、中国図書館学教育の発展に与えた影響を明らかにする。

M.ウッドはアメリカ・ニューヨーク州に生まれ、アメリカのボストン・シモンズ・カレッジ図書科を卒業し、1889年から1899年まで10年間アメリカの公共図書館であるリッチモンド図書館（Richmond Library）に勤務した経験を持つ。彼女は、1899年5月16日に弟がいる中国の武昌を訪ねるが、弟の勧めで、アメリカに帰らず武昌文華大学教授を務めた。ウッドの最初の情熱は、貧弱で利用度の極度に低いこのキリスト教大学の図書館建て直しに注がれた。その後、彼女は文華図書館学専科学校理事会理事、文華図書館学専科学校教授、中華図書館協会理事などの職を歴任した。M.ウッドが中国に滞在した31年間のうち、最初の10年間は文華大学で教鞭をとるとともに文華大学図書室を創設し、10年後正式に近代的図書館である「文華公書林」を設立した。20年後弟子と共同で文華大学図書科を創立し、31年後中国武昌にて世を去ったのである。このように中国図書館事業に一生を捧げたM.ウッドは、中国図書館事業の発展を願い、精力的に活動した²⁾。「中国図書館運動の女王」³⁾（the Queen of Modern Library Movement in China）や、「中国図書館学の先駆」と呼ばれたが、彼女は具体的に中国においてどのような活動を行っていたのであろうか⁴⁾。

筆者によるM.ウッドについてのこれまでの研究では、1920年代におけるアメリカの義和団事件賠償金第二次返還⁵⁾による中国の社会教育の発展について、特にM.ウッドを中心に行われた賠償金返還運動やその成果を明らかにし、また彼女の主導した活発な公共

図書館建設運動が近代的中国公共図書館の普及、さらに近代中国の民衆教育の発展に大いに貢献を果たしたことを明らかにした（「アメリカの義和団事件賠償金第二次返還による中国社会教育の展開－M.ウッドによる図書館運動を中心に－」『アジア教育』創刊号、2007年）。しかし、M.ウッドが公共図書館の普及に欠かせない図書館人材育成の問題についてどのように考え、どのような実践活動を行ったのかについては課題として残っている。更に言えば、前述したようにM.ウッドは当時の中国で「中国図書館学の先駆」とも呼ばれたが、具体的に中国の図書館学にどのような貢献を果たしたのであろうか。本稿では、彼女が弟子とともに、創設した中国最初の図書館人材養成機関の武昌文華図書館学専科学校に注目し、どのような活動を展開していたのかを明らかにする。

2. M.ウッドによる中国公共図書館建設運動

1910年代までの中国では僅かに蔵書楼（書庫）が存在するだけで、一般市民のために開放された図書館はなかった⁶⁾。当時武昌文華大学教授を務めるM.ウッドは、「中国民衆の教育不足や生活困難に鑑み、中国の社会教育に献身して、公共図書館（Public Library）の開設に努める」ことを決心するのである⁷⁾。

彼女による活動は武昌文華大学から始まった。1903年、彼女の主導により武昌文華大学内に閲覧室が開設され、一般市民や学生に向けて図書宣伝活動が行われた。そして、1909年、一時帰国したM.ウッドはアメリカの友人とアメリカ聖公会から10万ドルの寄付金を集めて、より広く一般市民に開放する近代的図書館である「文華公書林」（Boone Library）を設立した⁸⁾。「文華公書林」の「公」は「公開」・「公共」を意味するという。「文華公書林」は、文華大学の関係者のみを対象としたものではなく、学校の教職員、学生のほか、武漢三鎮の市民にも開放されていた。また、「文華公書林」では、学生や市民が自由に閲覧できるように、所蔵1万6千冊の図書をすべて公開して陳列し、開架式の図書管理が行われた。これは、当時の中国に先例がないばかりか、欧米においてさえ少数の図書館が試行しているだけであった⁹⁾。彼女による「文華公書林」の設立は、中国伝統の蔵書楼（書庫）の観念を打ち破って、一般民衆に対して図書館がその教育機能を発揮できるように、当時のアメリカの公共図書館の理念と制度を中国に導入する最初の試みであったといえる。

彼女はまた、1914年にはアメリカの公共図書館をモデルに、遠方の読者の需要に応えるため、合計22ヶ所で「巡回図書館」も開設した¹⁰⁾。公書林から遠いいくつかの学校などを拠点に、その附近に本を行きわたらせるとともに、書物の宅送を行ったりして、公書林に来ることのできない読者でも本が読めるようにした。「文華公書林」は、当時中国における唯一のアメリカ式の公共図書館であった¹¹⁾。また「文華公書林」は、閲覧室の増設、読書会や、講演会、展覧会の開催などを行い、武漢及びその周辺の各機関、各学校と数多くの市民に利用されるようになっていった¹²⁾。1924年、アメリカ合衆国下院外交委員会の公聴会でのウッドの発言によれば、「文華公書林」の利用者数は毎年約9万人に達していた¹³⁾。

また、1920年代初頭からM.ウッドは公共図書館普及活動の拠点を武昌にとどまらず、アメリカ国会図書館、アメリカ図書館協会、そしてアメリカ人帰国留学生を中心に組織された中華教育改進社（Chinese National Association for Advancement of Education）などの団体と連携を取りながら、中国全土に公共図書館の普及を押し広めようとした。例えば、M.ウッドと中華教育改進社の招聘とアメリカ国会図書館とアメリカ図書館協会の推薦を受けて、1925年4月28日から同年6月9日まで著名なアメリカ公共図書館専門家のボストウィック氏（Arthur E. Bostwick, 1860-1942）が中国を訪れて、全国調査を行い、中国全土で公共図書館を普及させる重要性を各地域で行った講演会や関係者に提出した意見書を通じて中国に伝えた¹⁴⁾。

こうしたM.ウッドによる活発な公共図書館普及活動、そして彼女により開設された公共図書館である「文華公書林」の影響を受け、1931年までに中国全土で900余ヶ所の公共図書館が設けられたという¹⁵⁾。

3. 図書館学専門人材の養成

A. 武昌文華図書館学専科学校の設立

上述したような図書館活動を進めるなかで、M.ウッドは図書館学教育の必要を痛感した。市民に開放する図書館は設立されたものの、当時中国の大学及び専門学校においては、図書館学の専門課程をもつ所は一つもなかった。そのため、M.ウッドは中国における公共図書館の普及のためには図書館学の人材養成が重要であると考え、1913年から、図書館学専科学校の設立に着手し始めた。彼女は、図書館学の学校を設立するために1913年と1917年に自費で文華大学

卒業生の沈祖棻（1883-1977）と胡慶生（1895-1968）をアメリカのニューヨーク州立図書館学校とコロンビア大学に送り、図書館学を専攻させた。1917年と1920年に、帰国した彼ら二人の協力でM.ウッドは、1920年3月に中国における最初の図書館学人材養成機関として武昌文華大学に図書科を開設し¹⁶⁾、「図書館学専門人材を訓練し、中国の図書館事業を発達させる」こととなるのである¹⁷⁾。1925年、文華大学は、華中大学と改称し、文華大学図書科も華中大学に編入され、1929年8月、南京国民政府教育部によって華中大学文華図書科として認可された¹⁸⁾。その翌年の1930年6月には、文華図書科は華中大学から離れ、独立の武昌文華図書館学専科学校となった¹⁹⁾。

1920年に設立された文華図書科は長年にわたり2年制の図書館学専門教育を行うことを通して、後に中国各省の図書館館長を担うことになる多くの卒業生を輩出した。そして、急速に増加し続けた公共図書館に対応するために、文華図書科の講師及び卒業生らは、各地域の大学や団体と連携を取りながら短期図書館訓練講習会を行い、図書館学の研究と実践に大きく貢献していた。

1. 2年制図書館学専門教育

a. カリキュラムの編成

M.ウッドが設立した文華大学図書科は、アメリカ人デューイ(Melvil Dewey, 1851-1931)が創設したアメリカのニューヨーク州立図書館学校の制度にならって、文華大学で2年の課程を終えた学生を編入させ、2年制の専門教育を行なうものとしたのである。その

後、大学卒業者ないしは大学で2年間以上在学した者が入学試験に合格すれば、入学を認めた²⁰⁾。学校制度はアメリカのニューヨーク州立図書館学校の制度に倣ったものとはいえ、カリキュラムの編成は完全に同じものではなかった。それは、1929年の『文華図書科季刊』に掲載される2年制図書館学カリキュラムの内容について下記の表1と表2からみることができる。

b. カリキュラムの特徴

上記の表1と表2から、この2年制の図書館学カリキュラムについて以下の特徴をまとめることができる。第一に、このカリキュラムは、アメリカの図書館学専科学校のカリキュラムの全面的模倣ではなく、中国と西洋を結合する体系を採用し、中国の実際と結びついたものであったことがわかる。第二に、このカリキュラムのなかで実習の時間数がかなり大きな割合を占めていることから専門科目だけではなく、M.ウッドが設立した「文華公書林」を利用して学生らに実習させることも重要視されていたことが見られる。つまり、学校から出てすぐに各図書館の仕事に就けるように実習時間を多めに設けられたことが考えられる。第三に、科目別内容を見ると、図書目録の作成方法や分類方法（デューイの十進分類法）、そして器械の使用や入力法など基本的な内容以外に、かなり専門性の高い図書館経済学、図書館行政学、図書館建築学などの科目が設けられており、専門性の高い図書館学専門人材の育成を目指していたことがわかる。

常任教員には、M.ウッド、沈祖棻、胡慶生のほか、1926年に卒業生の徐家麟を加え、さらに1928年に卒業生の毛坤と錢亜新を加えた。卒業生らは、2年間の

表1. 第一学年各科目授業内容一覧表(1929年現在)

科目名	時間数	授業内容
中国目録学	120	目録学の源流、派別と歴代図書分類の違いを学ぶ。
中文参考書列挙概要	80	中文書籍を参考する方法、及び目録、字典、叢書などの参考書の使用を学ぶ。
英文参考書列挙概要	80	西洋書籍を参考する方法、及び雑誌、字典、百科全書などの参考書の使用を学ぶ。
英文書籍選集	100	英米両国の著名な文学、歴史家、芸術家、科学者の著作を選んで読む。
英文書籍編目学	200	図書目録を作る原則、種類、形式及び目録の編成方法を学ぶ。
英文書籍分類法	40	書籍分類法の原理、種類、批評及びデューイ十進分類法の応用を学ぶ。
現代史料	40	最近起った世界との出来事及びその原因などを分析。
図書館経済学	80	図書館内書籍の収蔵、登録、出納、流通、排列、製本、印刷などを学ぶ。
英文入力法	80	器械の構造及び入力法を学ぶ。
各種字体書き方	40	上半期は英文各種字体を習い、下半期は中国宋字体を学ぶ。
実習	200	文華公書林で実習を行う。
特別講義	20	招聘される各図書館専門家による講義を聴く。

出典：呉鴻志「武昌文華図書科之過去、現在と将来」『武昌文華図書科季刊』第1巻第2期、1929年4月、231-232頁。

表2. 第二学年各科目授業内容一覧表(1929年現在)

科目名	時間数	授業内容
中国目録学	80	部類の順番、隸書の方法及び図書分類法と説明を学ぶ。
中文参考書列挙概要	80	中国文学、歴史地理、哲学、科学、宗教、美術、社会学などの参考書を学ぶ。
英文参考書列挙概要	80	西洋の文学、歴史地理、哲理、科学、美術、社会学、伝記などの参考書を学ぶ。
英文書籍選集	80	イタリア、フランス、ドイツ、ロシア諸国の著名な作家の代表作を読む。
中国語書籍選集	40	中国歴代の文学、思想家、史学家、芸術家、考証学家などの代表著作を読む。
中国語書籍編目学	40	図書目録作成の歴史、批評、及び中文図書の目録作成方法を学ぶ。
中文書籍分類法	40	中国旧分類法の概要を了解した上で批評し、新しい分類法の応用を学ぶ。
図書館経済学	80	図書館の設立、発展、宣伝及び社会サービスの問題を学ぶ。
現代史料	40	第一学年の続き。
中国図書館史略	20	(A)中国歴代官・私立蔵書の場所及び蔵書数、(B)歴代書籍の分類、図書目録、所蔵の概況、(C)歴代社会の変遷及びそれによる蔵書への影響を学ぶ。
西洋図書館史略	20	欧米図書館の起源、発展及び近状を学ぶ。
図書館行政学	20	図書館の設立、管理、経費及び規程などを学ぶ。
各種図書館の研究	40	各種図書館の行政、組織、管理及び経営を学ぶ。
図書館建築学	20	現代図書館の建築のシステムについて研究を行う。
特別講演	20	招聘される各図書館専門家による講義を聴く。
実習	120	文華公書林で実習を行う。

出典：呉鴻志「武昌文華図書館科之過去、現在と将来」『武昌文華図書館季刊』第1巻第2期，1929年4月，233-234頁。

図書館学専門訓練を受けて、1920年代から30年代にかけて中国全土に普及し始めていた図書館で活躍した。1930年までに、文華大学図書科の卒業生は60名に達し、その半分以上は各省の公共図書館や大学の図書館館長を務めていたという²¹⁾。

2. 図書館学教育の研究

a. 研究成果

前述したように、専門性の高い図書館学専門人材育成を目指した文華大学図書科では、教員らは教鞭をとりながら、図書館学についての研究を盛んに行った。中には、早くも1917年に沈祖榮と胡慶生が『デューイ十進分類法』をもとに共著した中国近代最初の図書分類法研究著書『デューイに基づく図書目録十類法』が出版された。表3は、1917年から1937年まで文華大学図書科教員および卒業生らによる図書館学研究著作一覧表である。

また、教員や卒業生に限らず、特に学校の機関誌として1929年『文華図書館季刊』が発刊され、在籍生らによる研究論文の発表が多く見られる。学生らは専門知識を勉強すると同時に興味を持つ図書館学分野

表3. 文華図書館科教員・卒業生による図書館学研究成果(研究著書)

出版年	著書名	著者
1917年	『デューイを模倣する図書目録十類法』	沈祖榮 胡慶生
1923年	『西洋図書館史略』	毛坤
	『図書館使用方法の指導』	喻友信
1925年	『デューイ図書目録十類法』	桂質柏
1927年	『档案経営法』	毛坤
1928年	『ペンイン著者番号編制法』	錢亜新
1929年	『簡明図書目録作成法』(翻訳)	沈祖榮
1930年	『索引と索引法』	錢亜新
1931年	『中国図書目録作成法』	裘開明
1932年	『中国図書館経営法』	桂質柏
1933年	『善本図書目録作成法』	于震寰
1934年	『中国十進分類法及び索引』	皮高品
	『普通図書目録作成法』	黄星輝
	『民衆図書館行政』(翻訳)	章新民
	『世界民衆図書館概況』	許嘉麟
1935年	『世界各國国立図書館概況』(翻訳)	严紹誠
	『国立中央大学図書館分類大全』	桂質柏
1937年	『標題総目録』(翻訳)	沈祖榮

出典：国家図書館出版社「『文華図書館専科学校季刊』総索引」2009,『中華図書館協会会報』総索引」2009。

表 4. 文華図書科教員・在学生・卒業生による図書館学研究成果（研究論文）

出版年	論文名	著者
1929年	「叢書の研究」	耿濟民
	「雑誌と索引」	錢亜新
	「国際図書館大会」	沈祖栄
1930年	「索引法概要」	羅曉峰
	「現在の図書館に対する認識と努力」	徐家麟
1931年	「プランおよび学科分類法」	吳立邦
	「郷村図書館経営法の研究」	李鐘履
	「図書館内の参考事業」	劉国鈞
	「図書館と読者」	董鈞仁
	「図書館開架式流通制度研究」	龍永信
	「書評の研究」	弋純
1932年	「配列・検索方法の原理」	錢亜新
	「図書館推進事業」	黃連琴
	「中国図書館立法の研究」	李容盛
	「国難と図書館」	沈祖栄
1933年	「法律図書の分類」	童世綱
	「図書目録作成部門の組織と行政の	龍永信
	「図書館作業の学術化と事業化を論	徐家麟
	「西洋図書館歴史概要」	毛坤
	「わが国図書館事業の改革」	沈祖栄
1934年	「民衆図書館の行政」	章新民
	「分類の理論と実践」	劉子欽
	「档案研究の対象と手段」	蔡国銘
1935年	「字典概論」	戴鑑齡
	「図書分類手引き」	張鴻書
	「比較図書館」	張鴻書
	「図書館は独立の科学になれるのか」	李景新
	「世界各国国立図書館概況」	
1936年	「図書館学問題」	李永安
1937年	「図書館員の心理分析」	吳尔中
	「参考書教学法」	張遵儉
	「アメリカ図書館学校歴史概略」	范国仁

出典：国家図書館出版社『『文華図書館専科学季刊』総索引』2009、『中華図書館協会会報』総索引』2009。

の研究を盛んに行った。1937年までに学校教員、卒業生、在籍生らによる投稿論文は433本に達していた²²⁾。表4は1929年から1937までの『文華図書館季刊』に掲載された研究論文の一部である。

b. 研究動向

表3と表4をとともにその研究動向を分類すると、四つに分けることができる。

第一に、図書館分類目録の研究である。例えば、沈祖栄・胡慶生『デューイに基づく図書目録十類法』（1917年）、桂質柏『デューイ図書目録十類法』（1925年）、沈祖栄『簡明図書目録作成法』（1929年）などの著書や、童世綱「法律図書の分類」（1932年）、龍永

信「図書目録作成部門の組織と行政の略述」（1933年）、劉子欽「分類の理論と実践」（1934年）、張鴻書「図書分類手引き」などの論文がある。

第二に、図書館の歴史の研究である。例えば、毛坤『西洋図書館史略』（1923年）、毛坤「西洋図書館歴史概要」（1933年）、范国仁「アメリカ図書館学校歴史概略」（1937年）などの著書と論文がある。

第三に、図書館管理の理論研究である。例えば、喻友信『図書館使用方法の指導』（1923年）、李鐘履「郷村図書館経営法の研究」（1931年）、李容盛「中国図書館立法の研究」（1932年）、章新民『民衆図書館行政』（1934年）などの著書と論文がある。

第四に、国内外図書館事業の研究である。例えば、沈祖栄「国際図書館大会」（1929年）、劉国鈞「図書館内の参考事業」（1931年）、黃連琴「図書館推進事業」（1932年）、沈祖栄「わが国図書館事業の改革」（1933年）、許嘉麟『世界民衆図書館概況』（1934年）、嚴紹誠『世界各国国立図書館概況』（1935年）などの著書と論文がある。

3. 短期図書館職員養成

前述したように、急速に増加し続けた公共図書館に対応するために、文華図書科の講師及び卒業生らは、各地域の大学や団体と協力し、図書館職員を訓練させるための短期講習会を行い、各地域の図書館職員養成に大いに貢献していた。

例えば、文華図書科が設立された直後の1920年夏に、北京高等師範学校で夏季休暇図書館講習会が開催され、沈祖栄などの教員がその講義を担当した。聴講者は各省立図書館および学校図書館員から構成されていた。1922年に広州において広東図書館管理員養成所が設立されたり、1923年から南京の東南大学で図書館学暑期学校、1930年から武昌文華図書館学専科学校で図書館講習班が開設されたりした²³⁾。そのほか、河南省の開封や四川省の成都、江蘇省の蘇州などで相次いで短期図書館学講演会が行われた。講習会の講師のほとんどは欧米などで図書館学を学び、中国に帰国した留学生や、文華図書科からの卒業生で占められていた。

B アメリカによる資金援助

武昌文華図書館学専科学校は、1920年3月に設立されてから1940年代までに継続してアメリカからの資金援助をもとに経営していた。その資金援助は主にアメリカ第二次義和団事件賠償返還金の管理運営機関

である中華教育文化基金董事会や、アメリカロックフェラー財団からの補助金であった。

図書館事業に関わる人材養成のため、1924年9月に中華教育文化基金董事会が設立された際に、M.ウッドが創設した武昌文華図書館学専科学校図書館学への教員支援（教員招聘など）と奨学金制度を設置することが決められた²⁴⁾。中華教育文化基金董事会は、この図書館学教員支援と奨学金制度の設置は、武昌文華図書館学専科学校を進歩させるためだけではなく、中国図書館学の将来のためでもあると認識していた²⁵⁾。この奨励制度の成果として、1929年から毎年、奨学金を25名の学生に与え、1人年間200円を支給していたことが記録に残されている²⁶⁾。

また、武昌文華図書館学専科学校の運営費に対して、中華教育文化基金董事会は1926年から年間約13,500円の補助金を支給した²⁷⁾。そして、武昌文華図書館学専科学校の発展に伴って、中華教育文化基金董事会による援助が拡大した。例えば、『私立武昌文華図書館学専科学校三十年度下学期概況』（私立武昌文華図書館学専科学校档案）によれば、1941年、中華教育文化基金董事会により同校に支給された補助金、特別補助金と特別救済金の金額は53,000円に達した。武昌文華図書館学専科学校は中基会から資金援助を受けながら学校運営を続けていたのである。

また、中国におけるアメリカ式の図書館学教育の向上とその定着のために、1940年代からアメリカロックフェラー財団は毎年15,000ドルの支援を行った²⁸⁾。

4. おわりに

以上より、1910年代からアメリカ人M.ウッドを中心に行われた中国公共図書館建設運動により1920年代から公共図書館の普及が大いに進められ、図書館人材不足の問題に対応するためにM.ウッドが弟子らとともに中国武昌にてアメリカのニューヨーク州立図書館学校をモデルとする中国最初の図書館人材養成機関である武昌文華図書館学専科学校を設立し、中国近代図書館学の確立及び図書館の発展に大きな役割を果たしていたことが明らかとなった。

同校は設立されて約十年間、文華大学に属したが、アメリカにおいてM.ウッドの精力的な働きかけにより、アメリカから独自の資金援助を獲得し、文華大学の政策に左右されずに終始独立した方針で経営を続けていた²⁹⁾。武昌文華図書館学専科学校は、中華教育文化基金董事会やロックフェラー財団からの豊富な資金

援助をもとに、多くの専門性の高い図書館人材養成を行っていた。そして、正式な学校教育以外に、講習会、訓練班の形態で図書館学教育も行った。武昌文華図書館学専科学校の影響を受けて金陵大学や大夏大学、嶺南大学などでも図書館学科が設置された。ちなみに、同校は日本の唯一の国立図書館学校である文部省図書館講習所の開設より一年早かったという³⁰⁾。

このように中国の図書館、図書館学の近代化はこの時期のM.ウッドの運動によって進められたのである。

注

- 1) 同校は設立された当初から「文華大学図書科」として機能し、後に文華大学から独立した学校である。文華大学はアメリカ聖公会（Episcopal Church in the United States of America）の出資により設立されたキリスト教系大学である。
- 2) 黄宗忠「武漢大学図書館学系60年—あわせて文華図専及び韋棣華がわが国図書館事業史に果たした役割を評す」『アジア経済旬報』1191号、1981年6月、18頁。
- 3) 出典：Encyclopedia Britannica, Women in American History.
- 4) 菲力浦斯(Grace D. Phillips)著「韋棣華女士興文華図書館学校」、『伝記文学』第18巻第5期、1971年、17頁。
- 5) 義和団事件というのは、周知のとおり1899年排外的秘密結社・義和団が清朝政府の支援を得てキリスト教及び列強の中国侵略に反抗し、各国公使館区域を包囲したため、日・米・英・露・独・仏・伊・奥の8カ国が連合軍を組織して義和団を鎮定した。その結果、1901年9月列国との間で結ばれた最終平和議定書により、清朝政府は39年間にわたり、以上の8カ国に総額4億5千万両の巨額の賠償金を支払うことが義務づけられた。その中、アメリカへの支払う総額は2440万余ドルであった。高額な賠償金の支払いは清朝にとって大きな重圧となり、その倒壊を早めることとなった。こうした中、アメリカは早くからこの賠償金を中国に返還して米中関係の改善に役立てようとしていた。アメリカの義和団事件賠償金の返還は、二度にわたって実施されるが、第一次返還が行われたのは1909年のことで、返還された賠償金は全額アメリカへの留学生教育事業に使われた。第二次返還は1924年から開始され、それは中国の科学・文化・教育など広範囲な文化事業の振興のために投入されるが、その中心事業のひとつに取り上げられたのが図書館などの社会教育事業であり、それはウッド女史の活発な活動によるものであった。
- 6) 『文華図書季刊』第3巻3期、文華図書科、1931年9月、361頁。
- 7) 嚴文郁（文華図書館学専科学校卒業生）「韋棣華女士興庚子賠款」『伝記文学』第18巻第5期、1971年、13頁。
- 8) John L. Coe, *HuaChung University, United Board for Christian Higher Education in Asia*, 1962, P.78.
- 9) 同注7。
- 10) 孔敏中「図書館は完全的教育機関」中華教育改進社編『新教育評論』第2巻第7期、1926年7月、20頁。
朝鮮総督府「支那における欧米列国人の教育的施設」『支那教

- 育状況一斑』。大正8年2月, 165頁。
- 11) 『諸外国の対支投資』下巻, 東亜研究所, 1942年8月, 518～519頁。
- 張錦郎・黃淵泉編『中国近六十年来図書館事業大事記』台湾商務印書館, 1974年8月。
- 12) 『文華図書科季刊』第3巻3期, 文華図書科, 1931年9月, 284頁。
- 13) 中華教育改進社(訳)「武昌文華大学図書館主任章棣華女士の談話」『米国返還庚子賠款餘額經過情形』上海商務印書館, 1925年1月, 66頁。
- 14) Priscilla C. Yu and Donald G.Davis,Jr. 「Arthur E.Bostwick and Chinese Library Development: A Chapter in International Cooperation」(*Library & Culture*, Vol.33, No4, 1998)
- 15) 董錫仁「章棣華女士追悼大会記略」『文華図書科季刊』第3巻3期, 文華図書科, 1931年9月, 362頁。
- 16) 『文華図書科季刊』第3巻3期, 文華図書科, 1931年9月, 337頁。
- 17) 同上。
- 16) 同上。
- 18) *The China Foundation for the Promotion of Education and Culture, Fourth Report*, 1929, P.147。
- 19) 同注8), P81。
- 20) 『文華図書科季刊』第1巻1期, 文華図書科, 1929年1月。
- 21) 呂紹虞「卒業生統計」『文華図書科季刊』第4巻1期, 文華図書科, 1932年3月, 104-106頁。
- 22) 『『文華図書館専科学校季刊』総索引』国家図書館出版社, 2009年。
- 23) 来新夏など著『中国近代図書事業史』上海人民出版社, 2000年12月。
- 24) 『中華教育文化基金董事会第一回報告』中華教育文化基金董事会, 1926年3月, 5頁。
- 25) 同上, 34頁。
- 26) 菲利浦斯(Grace D.Phillips)著「章棣華女士興文華図書館学校」, 『伝記文学』第18巻第5期, 1971年, 18頁。
- 27) 中基会の各年報告書に掲載された支給項目を参照した。
- 28) *The Rockefeller Foundation Annual Report 1944*, The Rockefeller Foundation, PP.242-243.
- 29) 同注8), PP.78-82
- 30) 大野沢緑郎「ウッドと中国の図書館」『一夏会報』第21号, 1978年, 10頁。

(指導教員 牧野篤教授)